

コラージュ製作による自己の プレゼンテーション表現について

～4、5歳児におけるコラージュ製作の活動を基に～

難波 章人、難波 瑞穂*

On Self Presentation Expression By Collage Production

～Based on Activity of Collage Production in 4 and 5 Year Olds～

by
Akito NAMBA
Mizuho NAMBA

【キーワード】コラージュ、情報活用能力、鑑賞教育、
主体的・対話的で深い学び、アクティブ・ラーニング

受理日 平成29年11月30日
純真短期大学こども学科 講師
* N保育園、V保育園 造形講師

1. はじめに

現代社会において情報化が急速に進展し、平成29年3月公示の新学習指導要領でも情報活用能力の育成が求められている。情報活用能力とは情報を適切かつ効果的に活用して、問題を発見・解決し、自分の考えを形成していくための必要な資質・能力である。情報を受け身に捉えるのではなく、主体的に捉えながら重要な情報を取捨選択して、選んだ情報を活用しながら他者と協働し、新たな価値の創造に挑んでいくことが重要である。

このような点を踏まえて本稿では、日常生活にあふれている多くの情報から必要な情報を選び、比較分類し、工夫しながらレイアウトして、自分の好きなものを表現するコラージュの技法を使った題材と課題を設定した。コラージュとは現代絵画の技法の一つで、ばらばらの素材を組み合わせて構成する創作技法である。雑誌やチラシなどの素材を自分で選び好きな世界をつくることで、自分らしさとは何かに気が付くことができ、改めて自分の心を見つめなおすことができるのである。4, 5歳児はまだ自分らしさとは何かを言葉にすることは難しいが、多くのものから選ぶことはでき、視覚的な要素を用いて他者に自分らしさを表現することができる。

作品を完成した後はお互いに発表して、お互いの良さを発見し、認めあうことができる。これは、アクティブ・ラーニングの視点から主体的・対話的で深い学びを実現するため鑑賞教育の中で実践し、活用することが可能である。近年、幼小の接続として「幼児期の終わりまでに育って欲しい10の姿」が重要視されている。この点を踏まえても4, 5歳という幼少期に主体的に学ぶとこ、学びに向かう力を養うことは必要である。

本稿ではこの活動の方法と園児たちの作品から実践事例を挙げて考察していく。

2. 実践方法

コラージュ制作の方法と手順

実践名：造形教室

日時：N保育園 4歳児クラス 2017年7月28日19名、9月13日19名

V保育園 4歳児クラス 2017年7月10日15名、9月11日15名

場所：N保育園 V保育園

対象：N保育園児 5歳児クラス19名×1クラス19名、11月16日19名

V保育園児 5歳児クラス15名×1クラス12名、11月13日17名

支援者：クラス担任の保育者

活動時間：製作40分×1回 鑑賞10分×1回

<準備するもの>

・コラージュする紙（雑誌、カタログ、チラシなどを切ったもの。）八つ切り画用紙、のり、鉛筆、色鉛筆、消しゴム、マスキングテープ、カラフルな柄や光沢のあるテープ

以下に製作手順を示す

- ① 活動を行う前に、子どもたちに好きなものは何かをイメージさせる。
参考例を見せながら、製作手順をおおまかに説明する。
のりに慣れていない児童もいるので、丁寧に使い方を説明する。
チラシの裏面にのりを貼ることを確認して、剥がれないように中央ではなく端に丁寧にのりを貼ることを助言する。
- ② 自分の好きな切り抜きの用紙を 4, 5 枚選ぶ。
切り抜きの用紙のサイズが異なるため、大きいサイズのものは 4 枚程度、小さいものは 5 枚以上など、助言して選ばせる。
好きな位置にレイアウトして、のりで貼る。
のりを付けすぎたり少なすぎたりする場合、保育者がのりを拭き取ったりつけたりするなどの支援をする。



- ③ 好きな模様や形を鉛筆や色鉛筆で描き加える。
思いつかない児童には、参考例を見せる、また、周りの児童の作品を見せ、自由に描けるよう支援する。



- ④ マスキングテープを貼り、装飾する。
寒色系、暖色系の色鮮やかなマスキングテープや、きらきらと光沢のある金や銀のテープなどをあらかじめ 4, 5 c m に切っておき、子どもが貼り付けやすいようにクリアファイルなどにテープを貼り、準備しておく。



⑤ 鑑賞する

製作後、作品を一堂に並べて、活動内で鑑賞教育をする。（10分程度）
作品をみながら、他人の作品の良い点を見つけ、自分自身の制作過程を振り返り思いを言語化し、自分の思いを他者に伝える。

保育者はファシリテーターとして、鑑賞活動を進める。



3. コラージュの作品について

① 5歳児の作品について

作品群A





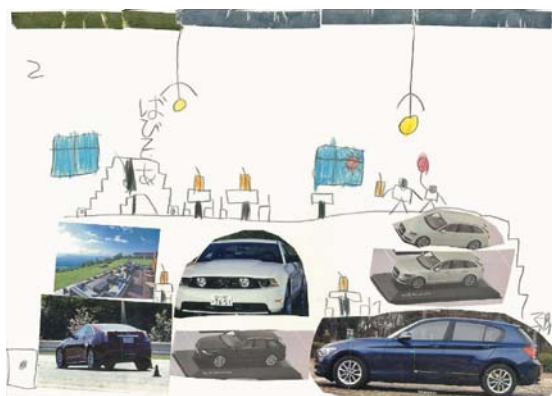
- 家庭環境や生活環境の中で知っているものや好きなものを選び、それぞれのモチーフを画面の中で考えながら配置している。
- モチーフ同士の関連性が見られ、画面上に物語性が生まれている。例えば、人物が配置され、その周りに景色やものがあり、ひとつの物語性が表現されている。
- 過去の記憶や現在、未来の願望が多様に表現されている。

作品群 B



- 子どもたち各々が、テーマを持ち、服なら服を集め、分類し効果的に見えるよう、レイアウトの工夫が見られる。また、同じモチーフを画面に並べたり、ちりばめたりしながら貼ることでリズムを生み出している。

作品群C



- マスキングテープの貼り方にも工夫が見られる。例えば、画面の端に貼ることで、モチーフの車だけでなく、風景や部屋など空間的な認識も広がり、画面上の構成にも工夫が見られる。また、モチーフの周りをカラーテープで貼ることでモチーフのイメージを強調している。

- モチーフのイメージが引き立つように工夫されている。例えば、画面の下に写真を集めて貼り、画面上には描画のみで構成している。
- ひらがな、数字など日常生活に基づく記号や文字なども表現されている。
- 画面の分割を行い、いくつかの違うテーマや空間を作っている。
- 色鉛筆で描くだけでなく、面として色を塗るなどして多様な技法がみられる。

② 4 歳児の作品について

作品群 A



- 家庭環境や生活環境の中で知っているものや好きなものを選び、モチーフの写真の大きさを比べながら画面に貼り付けている。
- 5 歳児と比較すると断片的なイメージを貼り合わせて構成しているようにみられる。モチーフの相互の関連性や物語性などはそれほど見られず、好きなものを意識的に選び取り、好きな色や形で表している。

作品群 B





- 車なら車で分類してまとめたり、食べ物は食べ物をまとめて並べて貼ったりと意識的に種類をまとめてレイアウトしている。
- マスキングテープの貼り方は特に意識せず規則的なレイアウトはそれほど見られず、貼りたいところに貼る傾向がある。5歳児のようにマスキングテープを線や枠として活用することが少ない。
- 色鉛筆の描画については、人物や星などの模様など、モチーフとの関連性のあるものを描き加えている。

4. 鑑賞教育

<ねらい>

- ・自分の描いた作品について自分の考えを言葉にして他者に伝えることができる。
- ・他者の作品の良さに気づき。良い点を発表することができる。
- ・製作過程を振り返り、おもしろかったことや発見したことなど、気づいた点を述べる。
- ・保育者側はファシリテーターとして製作過程を振り返らせ、児童の考えや思いを言語化し、わかりやすく言い換えること（パラフレーズ）で知識の定着を促す。このパラフレーズは、子供たちの語彙を増やし、文法を改善し言語の精度を高める手助けとなる。

＜活動形態＞

作品を中央に配置して、その周りを児童が囲むように座る。保育者は中央に座りその間を補助の保育者が座る。

＜鑑賞教育の過程＞

出来た作品を前に、「自分の好きなものが言える人はいますか？」と保育者が問いかけると、ほぼ全員の手が挙がり発表したいという意欲がみられた。その中の一人に自分の作品を持たせて、自分の好きなものを発表させるが、はっきりと言葉にすることが、難しかった。そこで「絵の中の何が好きなのかな？」と問いかけると「車」と単語で答えること

ができた。このように 4 歳児では具体物を指差したり、単語で答えたりする発表が主に行われた。

4 歳児においては、文法的に正しい言葉で他者に説明する事が難しいので、まずは指差しや挙手など思いを伝えることから始め、少しずつ単語で説明できるように支援していく必要がある。上手く言葉で発表することはできなくても、自分の思いを他者に伝えたいという意欲がこの時期では大切であると考ええる。

また、保育者が表現方法を工夫している作品を 2 点選び、児童に比較させる。「この作品とこの作品で、違うところはどこかな？」と問いかけることで比較、分類させる能力を養う。また、違う点に気が付くことで、それぞれの作品の技術的な工夫が明確になり、自分自身で気が付くことに喜びを感じさせることができる。

保育者はファシリテーターとして、児童の発言に応じて児童が言及した箇所を指差し、すべての発言に応じて言い換えを行い(パラフレーズ)、それぞれの意見を結びつける(リンクさせる)必要がある。そうすることで児童は思考を発達させ自ら考える力を養うことができると考ええる。

自分の好きなものを多くの情報から選び、比較・分類し、レイアウトして他者に視覚的に伝えようとすることで、コミュニケーションスキルをこの鑑賞の時間に学ぶことができる。作品を作るだけでなく、作った後を自分自身が振り返り、他者の作品を観察し、プレゼンテーションすることが、今後の新学習指導要領でも述べられている「主体的・対話的で深い学び」の実現として有効である。小学校以前の学齢から少しずつ取り組んでいくことが今後重要であると考ええる。

5. 総括と課題

次期学習指導要領においても、幼児期の深い学び、対話的学び、主体的学びの重要性を指摘されており、アクティブ・ラーニングの視点から様々な活動を見直す必要があると考ええる。

美術・造形の鑑賞教育では、具体的なテーマを基に自分なりの主体的な視点を持ち、他者の意見を取り入れ対話的な学びを身に付けられる。

この学びに向かう力は幼児教育において特に重要であり、小学校での学習の基礎となる。知識技能を教えてからではなく、自ら体験して感じ、発見したことから学びにつなげることが幼児期においては特に大切である。この時期に考えた思いを言語化することは難しいことであるが、保育者が少しずつこのような場を設定し、自分の思いを表現する機会を増やすことで、知識や語彙力が増え、豊かな言語教育につながる。

また、他者に伝えるコミュニケーション能力は今後ますます必要となり、幼児期から伝える喜びを体験的に味わうことが必要であり、鑑賞教育ではこのスキルを身に付けることが可能である。

美術・造形は製作活動が主となり、製作過程を改めて振り返ったり、できた作品の感想を述べたり、製作意図を発表したりする機会は少なくなりがちである。しかし、今後はこの様な機会を積極的に造形活動に組み込んで、鑑賞教育をしていくことも必要ではないか

と考える。実際、この度の実践においても、児童たちは思いを伝えたいという素直な心が強く、積極的な発表態度が多くの子から見られると共に意見を言うことに抵抗感も少ないため、この時期に学んでいくことは自然で効果的であると感じた。

友達の作品から様々な表現をみることで、「こう描けばよい」「こんな感じでよい」という自己肯定感を得ることは、今後、美術・造形などの自由な表現を苦手にするのを防ぐ良い手段だと考える。この自己肯定感が自信を持ち、主体的に表現したいという意欲を育むのである。

保育者は、作品の良い点に目をむけ、このように発表できたことに対して評価する姿勢が大切であろう。

今回は自分たちの作品における鑑賞であったが、西洋や東洋の過去や現代の作品について幅広い視点をもって紹介する時間や、テーマとして考えることも今後必要であると考え

謝辞

4歳児、5歳児クラスの園児たちへ、造形活動で御支援いただきましたN保育園、V保育園の先生方に感謝の意を表します。

引用・参考文献

- 1) 栗山誠、ノブコ・ウエダ、松本アリサ、著「造形絵画教室のアイデア集」ー子どもを夢中にする環境と教材づくりー, 明治図書出版株式会社, 1996
- 2) フィリップ・ヤノウィン著, 『どこからそう思う? 学力をのばす美術鑑賞ヴィジュアル・シンキング・ストラテジーズ』, 淡交社, 2015
- 3) 文部科学省(編), 「幼稚園教育要領」, 2008
- 4) 厚生労働省(編), 「保育所保育指針」, 2008
- 5) 教育課程研究会『アクティブ・ラーニングを考える』, 東洋館出版, 2016
- 6) C. ファディル, M. ビアリック, B. トリリング著『21世紀の学習者と教育の4つの次元・知識、スキル、人間性、そしてメタ学習』 北大路書房, 2016
- 7) 武藤隆著, 『学習指導要領改訂のキーワード』 明治図書, 2017
- 8) AI時代を生きる子どものためのSTEAM教育, 幻冬舎, 2017

N 保育園児、V 保育園児のその他の作品

